
ようかい×にんげん

ゆうた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ようかい×にんげん

【Nコード】

N9863Y

【作者名】

ゆうた

【あらすじ】

吸血鬼の男の子と普通の女の子が織り成すバカな小説です

モノローグ

「おはようございます 式羽^{にわ}智美^{ともみ}といいます 今月この学校に転校してきた者です 宜しくお願い致します」

「そう言うとは頭を下げた」

「お父さんの仕事の関係でこの学校に転校してきた 転勤だっけな？
そう言うってたけど本当は島流しなのだ」

「島まで流されたわけではないけど」

「まゝド田舎だ ウン」

「ん、式羽は左から2番目の一番後ろの席に座ってくれ
これからH^{ホーム}R^{ルーム}始めるぞ」

「前の席の人は銀髪 赤眼の男の人だった」

「(不良かな?)」

「あの……おはよう?」

「ああ おはよう」

「にっこりとおはようと返してくる」

「部活は?」

「テニス」 (幽霊部員でしょ)

「趣味は?」

「夜遊び」 (やっぱなあ)

「性格は?」

「おとなしい」 (嘘付けっ)

「好きな食べ物は?」

「ん……肉かな? 特にレア」

「これらのことが今日聞き込みをした結果だ ウン悪くない」

「この人はあまり悪そうな人ではなかった 先生に「なんで銀髪なんですか? 許してもいいんですか?」」

「と聞くと「あの子のは地毛だよ それにあの眼もカラコンではない」

らしい」

すごい人も居るもんだ

私は前の学校でもテニス部に入っていたので一応テニス部に入部偶然？奇遇？

部活の時間になるとまず例の子に話しかけた　　そういえば名前聞いていなかったな

「こんにちはっ！　お名前は？」

「……俊咲輝也しゅんさくてるや」

「輝也君だね覚ええとこ」

「苗字で呼べ」

「えー 名前のほうがいいと思うよ？」

「それとー俺に付き纏うな　痛い目にあうぞ」

「えーなんで？」

そういうとさっきからクスクス笑っている女の子グループを指差した指差されたグループは一気にシーンとなって四散した

私はその中の一人を捕まえて簡易事情聴取を執ることにした

モノログ（2）

「いや 少し話を聞いてもいいかなー？」

「いえ あの その」

私は小動物系というんだろうか？ かわいらしい女の子を壁に当てて脅している

ウン はたから見たら普通に変体行為だね♪

「まずは……なぜ笑っていたの？」

「いやあ……その……あの……グループでそうなってるんです」
「？」

「リーダーみたいな人がそう言うのと逆らえないんです」

「中心人物は？」

「い……言えません！」

「ふうん？」

「ひっ！？」

私はその子を連れて（手首を後ろで縛って）私が思い当たる女の子のところへ連れて行った

「やっ 弔さん^{とうさん}」

「ああ 弔^{とう}さんか 部活は？」

「サボってますひとつ質問していいですか？」

「なに？」

縛られている女の子はじっとしている

「この子の仲良くしているグループのリーダー的な人って知ってる？」

この人は学級委員でクラスのことはよく観察していると先生が言っていた

「うーん 御木本^{みきもと}さんかしら？」

「っ！」

核心を突いたようだ

（1時間後）

「あら？ 式羽さんじゃない　なんで樽谷さんの手縛ってるの？」

「あなたに話があつてきました」

私は手枷を取って離れた　すると一目散に逃げた

「なにかしら？」

「輝也君のことです　なんであなたの仲良ししているグループで避けてるんですか？」

「そこまではれちゃってるの……」

「答えてください」

「フられたからよ」

「……それだけ……ですか」

「そうよ」

「あなたが？」

「そうよ」

「好きだったんですか」

「そうよ」

「今は？」

「関係ないわ」

「そうですか」

「それで？ あなたが言いたいことはこれだけじゃないはずよ」

「……」

この人も私のことをよんでいるみたいだった」

「言いなさいよ」

「輝也君を阻害するのはやめてください」

「イヤよ」

「え？」

「イヤよ絶対イヤ」

「なんでです？」

「私をフったから」

「……それじゃああなただけ阻害すればいいじゃないですか
あなたおかげで輝也君が肩身の狭い思いしてるんですよ!？」
あなたの影響力を考えたことあります？

学校全体が一人を阻害したらどうなるか分かりますか!？」
私はいつの間にか怒鳴ってしまった

前の学校では人前できっぱり言いすぎていじめられていた過去がある
どこかフラッシュバックしてしまったのだろう……

「あなたの言いたいことは……わかった」

そう言ってなんとなく反省した顔でどこかに消えた

部活終了の音楽がながれている 10月のことだった

10月4日

「おはよお」

「おはようございます」

学校での輝也君への阻害がなくなった2日後

1日1回じゃすまないほど告白されているらしい　すごい……

しかもその一人目が弔さんで阻害が始まったとい経緯だ

「おはよっ」

「んーおはよー」

私とはみんなとは違う挨拶方法なのだ　理由は簡単　私が助けたからである

「その　言いくいけどありがとな？　お前がいなきゃ自殺してたかもしれない」

「いいっていいって　その代わりちゃんと周りの人と目を合わせて会話すること」

「うん　お安い御用さ」

ガラガラッ

「おはよう　みんな席に着け」

ガヤガヤ

「H R ^{ホームルーム}始めるぞお」

来て初日に思ったのだがとんでもなくゆるい先生だ　年齢は……20台だな絶対

朝のH Rが終わった次の授業は美術

私の好きな科目なのだ

「なあ　あの　教えて？その……美術」

「へ？」

「もうすぐ期末じゃん」（一ヶ月あるよ……）

「うん？　まあいいけど？」

「ありがとう！」

うわあ聞いていた周りの女生徒の視線が痛い　私は逃げ出すように美術棟に向かった

《一時限目　美術》

「きりーつ　きおつけーれー」

「おねがいしまー——」

ガタガタと音を立てて座った
全くゆるい中学校だ

「はい　それでは勉強を始めていききたいと思います
まず　美術資料P39を——」

私は熱心に聴きながら輝也君に教えていた

「それじゃあ　ここを——式羽さん」

「は！？　はいい！？」

あははと声があがる　声が裏返りまくってしまった

「……私語を慎みなさい　美術資料P39　『最後の審判』の作者」

「ミケランジェロ」

「ご名答　どこの協会に作られたかを——栗山君」

「バチカン市国」

こんな感じに授業は進んでいった

《帰宅前のH R》 ホームルーム

「はーいH R始めるよ」

前で輝也君が死んだ顔をしていた勉強は終わった
もう私が教えたことは完全に覚えたみたいだった
授業そっちのけでやってたからなあ

「はーいそれでは解散　起立　きをつけ　礼」

「ありが——」

授業のときより早い！？

「部活いこっか」

「うん」

《部活》

私は実質 部活は1日しか出ていない

顧問は氷羅先生 ひょうら 女だ

「はいはい（手をパンパン）まずは組でラリー」
ダブルス

「はい」

私の相方は和田さん わだ 和田さんが後衛で私が前衛
少しソフトテニスのことを触れないといけない
ソフトテニスとは基本ダブルスで行う

□基本的にこのようなポジションをとる

- ・ 2人とも後ろの『ダブル後衛』
- ・ 2人とも前の『ダブル前衛』 これは基本中学校ではない
- ・ 1人前 1人後ろの『基本ポジション』 名前はない

殆どの組は最後の『基本ポジション』だ
ダブルス

ネット前につくのが前衛 後ろのサーブラインでボールを打つのが後衛

前衛は前でスマッシュ・ボレーでトドメをさす役目

後衛は後ろでチャンスを前衛に作る役目になる

私は1・1のラリーではサーブラインより1歩後ろで打ち返して相手も同じように打ち返す

そうして ラリー↓前衛練習↓後衛練習↓サーブス↓生理運動↓コート整備↓解散

《帰宅後 家》

疲れた

「ただいま」

「おかえり」

母さんが家にいた

かえってすぐ風呂に入ってご飯

あしたの準備と宿題しなきゃ

時間割を見る 筆箱を開き中身を見る シャープペンシルを出して

カチカチッ

「アッ あーシャーペンの芯買うの忘れてた
かーしゃーしゃーさん」

「なに？」

「105¥也」

「文具？」

「シャーペンの芯」

「ん」

私は夜8時に家を出た 女の子だけど変わらない……よね？

そこで私は“本当”の輝也君を見ることになったんだ……

10月4日(2)

ガシャリンと自転車をストッパーの拘束から解き放つ
シャアと走り漕ぐ

「ううう 寒い！」

100均一(105円均一)に到着

ちゃんとあるんだな 100円均一

この閉店時間は……10…30!ダイジョブだ

文房具の棚からシャーペンの芯を取って買った

帰ろうと自転車に乗りうとしたその時

「？」

私は街頭の上に人が座っているのを見るのが初めてだった田舎人は
みんなするのかな？

いや無理だろう

「だれ？」

「……俊咲 輝也」

「うそ……」

見た目は全然違った短かった銀髪は長くロングヘアに

眼はもともと赤かったのに真ん中に切れ込みの黒い線が入っている

「本当だ 貴様は？」

口調も違う

「私は式羽智美」

「ふむ 昼のクラスメイトか」

……感じが違う

「あなたは本当に輝也君？」

「そうだ どこか違うとも思ったか？」

「性格 見た目」

「ふむ いいところを突いてくるそうだな俺は夜と昼とで人格が違う」

「え？」

「吸血鬼は日光を浴びると弱くなると知らないか？」
ヴァンパイア

「吸血鬼……！」
ヴァンパイア

「そう吸血鬼だ 朝の7…00〜夜の7…00まで昼の人格
夜の7；00〜朝の7；00までは俺の時間だ
そして人格が変わると同時に風貌も変わる」

「信じられない！」

私は自転車に飛び乗って逃げた

輝也はフゥと息をついた

S A I D…輝也

俺はため息を漏らした

やはり人間と非人間は相容れられないものなのだろうか
話しかけられたことは正直ビックリした

昼の人格に夜話しかけてくるような人物はいないはず……
どうしようか本性ばらしてしまったな

……追いかけるか

タツつと8mの電灯から飛び降り、地面を一蹴りした

パァンと地面が鳴り上空20mを空中飛行した

1歩で間に合うと

「なんで逃げる？」

「……今どこから来たの？」

「質問に答えろ」

「あなたは輝也君ではありません」

「なぜ？」

「格好が違うから」

「説明はした」

「私の知っている輝也君はシャツのボタンを3つも開け放したりし
ません」

「この方が楽だ」

「じゃあいつも学校で我慢してるんですね？」

敬語だな

「人格が違う 昼の奴がどう思おうと勝手だ」

「吸血鬼^{ヴァンパイア}なんか信じません」

「そうか 残念だ」

俺はまた地面を蹴り向こうに見える山へ足を向けた

山でなくてもよかったどこでもよかった

ただ人気^{ひとけ}のないところへ行きたかった

10月4日(2) (後書き)

加筆しました

10月5日

「……」

私の目の前の人は眼はいつもと同じく赤いだけ 黒みがさしている
昨日は真っ赤今日は赤黒い 髪はぼっそり切った模様

「……」

二人とも二人共に話しかけない 昨日の事があったからだ
そだそだこれがあった

「おりゃ!」

私は用意したロザリオ? 十字架? をあててみた

「ぐああ!」

ジュウウと焼ける音がした

「いってえ!」

「あはー ゴメンゴメン」

「それは ロザリオ?」

「あーうん 昨日の事があったから実験」

「昨日……ね」

「なんで焼けるの?」

「焼けているわけじゃない 肉体が嫌がってるんだ」

「へー ……それじゃあ 本物なんだ……ね?」

「うん」

「へー……他の子には秘密にしておくよ」

「ありがとう そのーこんな体だしあれ? 嫌悪する?」

「……少しは変わるかも」

「そうか」

今日は何事もなく部活になった

《部活》

「はいはい (両手をパンパン) ダブルス 組でストレッチしてからラリー!」

「はい」

パーン パーンと音が鳴る

「ちょっと式羽さん来て」

「あ……はい」

《顧問部屋》

「あなた来週の試合出る？」

「え？ ハイ！是非！」

「予定とかは？」

「いえありません」

「そう それじゃあ来週の15日、日曜ね」

そう言ってプリントを渡された

「部活に合流なさい」

こうして一日は終わった

10月15日

「ふう」

私以外に、和田さん、別ペアの美東さん、東さん、蝶日さん、鳥野さん、戸曾^{とひい}さん、霧^{きり}さんの4ペアだ

男子も来ているのだが名前がいまいち覚えられない
輝也君の組^{ダブルス}ペアは相手は井町^{いまち}さんだ

『開会式を始めます 選手の皆さんは第1コート〜第4コートに集まってください』

「開会挨拶」

「〜省略」

「審判の説明」

「本大会は日本テニス連盟公式ハンドブックより〜省略」

「それでは試合のコートを発表します」

この大会はトーナメントである

「〜式羽・和田ペア 第14コート」

「いこう……」

和田さんは超無口キャラだ

「うんっ」

相手は仙崎中学校のエースペアだ

「礼!」

「おねがいします」

「トスしてください」

「ジャンケンポン!」

「表でお願いします」 ↑私

「裏お願いします」

負けたほうがラケットを回転させて地面に落とす

「表です」

「レシーブお願いします」

「乱打お願いします」

□乱打とはラリーの練習である

「レディ！」

□レディとは女の子という意味ではない 「やめてください」みたいな意味

「5（ファイブ）ゲームマッチ プレイ！」

上からのサーブ 和田さんがレシーブ

和田さんは後ろについて私はラケットの根元と先を持つ

相手がストロークを打って来る

ボレーをする ↑結構これで決まるのになあ

なんとか返される

和田さんの握りが違う……基本がウェスタングリップで和田さんは

イースタングリップだ

理解した カットだな

□カットとは回転をかけてバウンドを変化させる打ち方である

ザシュッと逆回転がかかり敵はそのバウンドを見切れずロビング

□ロビングとはロブのこと ボールをあげる（上に打つ）山なりなボール

それを私は渾身の力をこめてスマッシュ！

「セイツ！」

相手の意表をついてこの点^{ポイント}は頂いた！

……がんばれば勝てるかも……

10月15日(2)

『表彰式を行います』

省略

女子個人・優勝 水戸・美談ペア
準優勝・式羽・和田ペア

私達は結局決勝戦で負けちゃった……

「和田さんっ 惜しかったね!」

「……うん」

返事しないのか……と諦めたその時言うからな……分からないんだよね

……男子個人優勝・俊咲・尾田ペア

輝也君は圧勝だもん……凹む……

これにて表彰・閉会式を終わります』

「さあさあ(両手をパンパン)準備してー 帰るわよ」

私達はバスに乗せられて来たのだ

バスの中では

「式羽ちゃんすごい」とか

「和田さん カットうまいー」とか

「俊咲君かっこよかったー」とか

みんな口々に囁し立てている

《校庭》

「はいはい(両手をパンパン) バスに忘れ物はない? いいね? それじゃ私の所見を3つほど

1つ目は和田さん、カットは強いかもしれないけどここぞというときだけ使わなきゃ

武器にはならないわよ

2つ目は全員、サービスの特に上からのサービスが入って無い

プレッシャー

これも相手に圧力をかけるいい手段だからサー・レシを練習すること最後に応援の声が小さい 敵チームの声に押されてる

これだけを踏まえて 今日解散」

やっただー

ちなみに男子は顧問が別なので遅い模様

輝也君を見て見返されて私は目を逸らした

真っ赤になって逃げるように帰る

あんなことしなきゃよかった

時間は遡る

《試合テニスコート 第3コート 応援席》

私は輝也君の試合を観戦していた とても声は出せない

周りに人が居過ぎて恥ずかしい

輝也君は後衛でなんとか踏ん張っている

ポイント

デュース

この点を取れば3…3取れなければ4…2でゲームを取られて負けになる場面

ハラハラして試合をみんな観戦していた

その時敵チームがカットをかけてきた

それを私は気付いて思わず

「輝也君！ 気をつけて！！」

と特大の大声で叫んでしまったのだ

それで輝也君は1歩前に出ておかしいバウンドに対応できるところにいったのだ

試合が終わった後に真っ赤になっている私に

「応援ありがとな。 お前の声がないじゃ 打ち返せなかったよ」

「ッ!！」

と撫でてきたのだ

やばい……と逃げ出してきたのだ 周りの女の子の視線がいたい
それからちようと逃げた先で私の試合があったのでそれ以来顔を合
わせてないのだ

《学校からの帰り道》

「はあ……」

10月も半分が過ぎ6時となればもう暗いのだ
コロンと石ころを蹴った

思い出しては赤面し思い出しては赤面する

黒歴史認定だよお

10月15日(2) (後書き)

この度題名を変えました

10月16日

「おはよー」

「おはよう」

今日は輝也君机に伏している　なぜか耳まで真っ赤だ
風邪でもあるのかな？

でもこの前のこともあるし……話しかけられない

「式羽先輩　少し話があるんですが」

「……誰？」

「1年の寺我と申します　二人称はなんでもいいです」

ガバツと輝也君がこっちに向いてきたがすぐに元に戻った
「お時間は取らせません」

《校庭…部室倉庫裏》

「話というのは簡単な質問です」

「なに？」

「では2つほど……妖怪は信じますか？」

「!!!!　信じる」

「それでは　俊咲先輩の正体を知っている？
あれですよ吸血鬼^{バンパイア}」

「!!!!」

言ってもいいのだろうか……

「知ってるわ」

「そうですか　それでは最後にひとつ付け加えましょう
吸血鬼^{バンパイア}以外にも妖怪はいます

気をつけてください　また会うことを……」

そういうと歩いてどこかへ消えた
なんだったんだろう？

《1時限目 数学》

なんだろう？ 聞いたほうがいいかな？

「輝也君？」

「……」

無視かな？

「あなた以外の妖怪はこの学校にいるの？」

「……」

また無視されたっぽい

「それじゃあ質問を変えるわね 妖怪は吸血鬼バンパイア以外どんなのがいるの？」

「……」

「ちよっと？」

後ろから服を引っ張ってみた

「うわあ！？」

「十字架ロザリオあてるわよ？」

「スミマセン それだけはお許しをー」

スッパーン！ 輝也君の後頭部にチョークが直撃！

「私語を慎みなさい」

「「はーい」」

事は3時限目に起こった

《3時限目…保健の少し前》

今は授業と授業の間にある休憩時間、つかの間のひと時である

私は水筒から暖かいお茶をズズツと吸った これがなんともいいない……

すると私を……いや学校をとんでもない瘴気が襲った！

この感覚 あの夜に似ている……

『出て来い 俊咲』

「！」

輝也君はビクリしたようだがすぐに気を取り戻しキツッと目つきをきつくした

すると夜限定のハズの吸血鬼^{バンパイア}の人格を表に出した

「フン……3下が」

すると口調が一気に変わり目には瞳孔の黒い線、

あるときには気付かなかったが犬歯も相当伸びている
髪の毛はいたって普通だ

「どけ」

窓に足をかけると次の瞬間一陣の風が吹き荒れた
目をやると其処にはもう誰もいなかった

10月16日(2)

「寺我 なんのようだ」

「知っているくせに よく言いますね、弐羽さんの奪還ですよ」

「フン 俺はどうでもいいがそれも任務だからな 弐羽は俺が守る」
「できますかー？ あなたに クスクス」

チツ 実戦は久方ぶりだ

「死ね！」

俺は爪を俺の力で引き伸ばし1m30cmはあるだろう そしてよく切れる

ジャンプして間合いを詰めて斬りをかます

「フフ」

真っ二つになったが幻影だった

「私の正体を忘れちゃったんですか？ 悲しいですねえ」

「……生成り……」
ドッベルゲンガー

「そうです生成りです」
ドッベルゲンガー

人生を盗み自分のものとする妖怪

幻術に長けているんですよ？」

「フン！ 戦闘能力は並みの妖怪より低いしな」

「あなたはもう私の手中にハマってますよ？」

俺の視界が揺らぐ 膝から地面に突く

「グッ！？ ウワアア！！？」

俺は叫んだ 叫んでも叫んでも叫びきれなかった

「グッ うっ……」

妖力でなんとか跳ね返す

「幻術だけで言うど夢魔サキュバスの次ですからねえ」

「ぐうう」

俺は髪を全力で伸ばした

「はーはー」

銀髪は地面に届くほどだ

そして背中の制服を破って翼を引っ張り出した

俺の視界には寺我がいない

ブワツツと羽を使って空を舞う

「逃げるつもりですか？」

ふふ ドッベルゲンガー 生成りの固有能力って知ってます？」

「他の生き物と同じ姿、能力をコピーできること」

「よくしってます……ね！」

まさか蠅になっているとは！？

うしろで俺に化けた寺我が襲ってくる

「フン！」

鋭い羽で千切りにした

「ご……ふっ！？」

死んだな……

「まさか……そこまで翼を扱えるとは……思いも……ゴフツ」

7枚にスライスされた寺我は口から血を吐き落ちていた

翼を縦に振り血を落とした

ブウーンとその7枚にスライスされた寺我が消える

「んな！？」

「幻影ですよ」

後ろに回りこまれ生成りの爪が俺を切る ドッベルゲンガー

「ぐあ」

鋭くはないので腕にザツクリいった

これは実体がある！

「おらあ」

俺は爪で思いつき横から斬りつけた……が斬る瞬間に幻影を作って逃げた

「ふう 手強いようね」

「！ 弔！」

「手を貸してあげましょう」

「お前……来るな！邪魔になるだけだ！ 第一妖怪でも……」

「私は夢魔^{サキユバス}よ この程度の幻術なら破れる……わ！」

パリーンと俺の背後にいた寺我が顕になった

「くっ」

「幻術縛りをかけたわ 今から私が念じている間そいつは幻術を使えない！」

「オッケー！」

俺は弔に向かう寺我を背中から切りつけた

「が……」

今度こそKOだ

「くっ この学園に2人も妖怪がいるとは……親方様に報告せねば」
そう言って消えた

「！幻術は使えないはず」

「移動術なら使えるわよ 私はあくまでも幻術^{マジック}を封じたんだから」

俺は戦闘が終わり人格と体を元に戻した

「でもやっぱ かつこよかったよ ウン やっぱ運命の人だわ」

俺は深い眠りに着いた

視点…弔羽

「んなんなんなんな」

目の前では輝也君と（熟睡）超ハッピースマイルで抱きついている
弔さんがいた

「あら？弔羽さんこんにちは」

「まだ朝です それとー 輝也君から離れてください！」

弔さんを引き剥がすと熟睡している輝也君を見た やばい 何も出
来ない

「保健室にでも連れて行くわよ」

そう言って指を振ると体が浮上して連行された

「あなたも……」

「恋の妖怪・夢魔^{サキユバス}よ よろしく」

「あ……あははー」
私はへたり込んだ
何でもあるだわ……

10月18日

水曜日かあ

週の折り返しだ！

「……」

「あ、おはよ」

「おはよ」

いつものクラスメイトが挨拶をしてくる

輝也君と弔さん、今日は結局来なかったのだ

本性を皆に見られてしまった以上先生たちが止めても退学していた
だろう

部活から帰る

《家》

「ただいま」

三日前までは家には誰もいなく、「ただいま」など言っていなかった

「「おかえり」」

玄関に駆けて来る吸血鬼と夢魔を見た

「いつまでいるの？」

「俊咲君がいるまで」

「任務を遂行するまで」

「その任務って何なの？」

「極秘任務だ」

昨日の会話を思い出す

《回想 10月17日》

ピンポーン

「ハッ」

部活から帰ってきて少し居眠りをしていた

誰だろ？

ガチャ

「やあ 弐羽さん ちょっと話が」

え……

「私もいるよ！」

え……

「うんまあ入って」

「失礼しまーす」

何この二人 息合いですぎ

リビングにかけてもらった

「話って？」

「俺は学校を止めて浪人することにする」

「へ？」

「私も」

「そういう事でここに居候させてくれないかな？」

「は？」

「私も」

「え？」

「お金は出すからさ 生活費と、感謝費」

「うえ？」

そういう事で居候することになってしまった

《回想終了》

「とりあえず1日5000円でこれから13日、6万5000円？」

「いやいやいや 受け取れないよ」

「私も同額、はい！」

いやいやいやいやいやいやいや

あわせて13万？ 30日になったらどうなるの？

いやいやいやいやいやいやいや

アカンってアカンって

「いや！ 受け取れないよ」

「いや 住まわせてもらってるんだから、これはお礼！ 受け取って？」

「弔さん……」

「食費もバカにならないはずだから？ ね？」

だったらこれだけお金あれば他のところで生きていけるハズなのに……

任務……ねえ

「それじゃあ 遠慮なく受け取るよ？」

「「どーぞ」」

なんでこんなに息が合うんだろう？

それじゃ、買い物行ってこよ

10月19日(前書き)

視点.. 弔さんです

10月19日

「いってらっしゃーい」

ニコニコ顔で私は式羽さんを送った

リビングに戻るとコーヒーを飲んでくつろいでいる俊咲君発見！

「なにしてるの？」

このコーヒー豆は昨日買って来てくれたのだ

それに昨日多めにカレーを作って今日のお昼ご飯に回すよう言われたし……

主婦的才能はバッチリだねあの子

「ん？ 新聞の鑑賞」

「おもしろいの？」

「人間界の情報は8割この新聞紙から取り入れている」

「俊咲君の任務って何なの？」

「式羽さんの保護」

「……それっていつまでやるの？」

「式羽さんが自分の力に気付くまで」

「私の任務は今のところないしね……」

ここの親はもういないらしい

おばあちゃんたちからの仕送りで家計を何とかしてきていたらしい
そこに13万円入ったわけだ、とても楽になるはずだね？

お金は私達は親が相当もってる富豪の家だから大丈夫だけど……

あゝあやることないなあ

「散歩してくる」

「外見変えとけよ」

「うん」

さり気なく心配してくれてるのが嬉しい

10月19日(後書き)

弔..「ちよつとどういうこと?」

作者..「なにが?」

弔..「私の姿身の描写がないじゃない!」

式羽..「私も!」

作..「ああ ゴメンね! 少し考え忘れてて ここに書くよ!

式羽

眼、髪は黒 髪はロングヘア

眼はたれてる感じ、柔らかくて人当たりのいい性格
運動神経、家事全般は大体こなせる

弔

眼は深い青、髪は淡いシルバーブロンド

まつげが長い 眼はパッチリしている美少女

運動神経はすこしボケてる 家事は点でダメ

夢魔^{サキュバス}で胸は中学1年にしては大きい(設定)

えーっとそだね ウン Dカップってことで

作..「こんなのでいいかな?」

弔..「私もっと大きいわよ」

作..「胸とか嫌いなんだよね」

式..「私のサイズは?」

作..「B」

式..「……ありがと」

全..「次回もよろしくー」

10月19日(2) (前書き)

視点は弔さんです

10月19日(2)

「ふぁゝあ」

腕時計を覗く 8..20

「ねむたいなあ」

私は眼を白、髪も白いロングヘアにした
背も高くして胸は縮めた これで平均的な人間に見えるかな？

うーん 空が澄んでるなあ

人間界の空って綺麗だな

私は近くの公園で暑い日差しを受けつつベンチでボーとしていた
10月といえど日差しは暑いわね

さあて練習練習！

「技 衝撃波」
ソーサリー・ニック・ブーム

手を前に向けて高位夢魔のスキルを使う
レジェンド・サキュバス

もちろん下級の私がこんなのを使えるわけもなく私は“誘惑術”と
メルース
“幻術”が使えるだけ
イマジ

学校は真面目に受けてないから(夢魔の学校)
サキュバス

センスのいい同級生なら高位夢魔のスキルくらいは使えるでしょう
レジェンド・サキュバス
ちなみに夢魔は女の子だけでなく男の子もいる

女の子はかわいらしく男の子はかっこいい
サキュバス

人間界のモデル？とか俳優？とかで稼いでる夢魔もいる
サキュバス
でも男の子の夢魔はサキュバスではなくて男魔インキュバスって呼ぶ

話が脱線しちゃった

練習練習！

視点…俊咲

弔さんが出て行って20分 俺は新聞を読み終えた

何しようかな 今日学校の見回りかな

スツッと立ち上がってコーヒークップを洗って乾燥させるタオルを

敷いた棚に置く

式羽はすごいなあと感心する 家事は出来るし、性格もいい
少なくとも俺を救ってくれた

まあ助けられなくても俺は関係ないんだがな……

まさか同じ学校に転校してくるとは思わなかったし

しかも前後ろの席って完全に奇跡

ま、俺は退学だが……

さあて何しようかなー？

視点…式羽

《3時限目 体育》

「いっちにーさんしー」

「「「「ごーろくひちはち」」」」

「にーにーさんしー」

「「「「ごーろくひちはち」」」」

「集合体形に戻れ！」

「「「「いっちにっさん！」」」」

「はいはい（両手をパンパン）体育係さんは列に戻って
これから5時限分くらいバトミントンをするわよ

全員 ラケット持って シャトルも」

「はい」

さあてバトミントンきたー！ー！ー！

（20分後）

「「「きゃーすごい」」」

「いやいや」

私は注目の的だった

バトミントン部がなかったためにテニス部に入ったのだ
私の本領はバトミントンである。

「それじゃあ とりあえず サービスの練習！」

「「「はい」」」

「10分後」

「はいはい（両手をパンパン）
次はスマッシュの練習」

それから一日私は楽しいバドミントンも時間をすごした

10月19日(2) (後書き)

ちよつと加筆しました

10月20日

妖怪さんたちが居候を始めて早3日

この人たちは基本私がいない間、何をしてるんだろう？
学校について部活に出て帰る間は9時間くらいかな？

3日も9時間何してるんだろう？

私は最近そう考えるようになった

登校時・下校時・休憩時間、ずっと考えてる

絶対暇だよね……

任務ってやる事いっぱいあるのかな？

『ピンポンパンポーン 1ー1の式羽さん 直ちに職員室前にきなさい』

あれ？担任の声だ でも相当怒ってる声だよ？
早く行かなきゃ

《職員室前》

「ん？……！」

「あっ智美ちゃん！」

「……島田姉^{しまだね}え 何で来てるの……」

「気になっちゃってきちゃった」

この人は私の従姉妹^{いとこ}ぶっ飛んだ性格で一度決めたら遂行するまでやりきるバカだ

バカとか言ってるけどこう見えて一流企業に就職、3年で次長だありえないありえない

「後でね！ 授業だし……」

私はその場を後にした

《下校中》

「智美ちゃん！」

またきた……

《家》

「ただいま」

「「おかえり」……！」

「んな！？ なぜ…… んむ！？」

弔さんが口を塞いだ

「いやなんでもないよ 少し尚古しやうこさんに話があるから3人で……あはは」

なんだろう？

これは悪魔の夜の始まりだった

10月20日（後書き）

尚..「さあて 例のあれをやってもらいましょうか」
作..「ハイハイ」

尚古のスタイル

背は結構高い まあ大人だしね

172cmとしておきます

性格はおてんばで頑固 どちらの主人公にいそうな性格

胸は... いちいち胸ネタは変体におもわれがちなので控えさせていただきます

髪は淡いピンクのショートヘア 眼は澄んだ黄色

尚..「胸ネタはなし...ほっ」

作..「ま、尚古さんや式羽さんの家系は胸ちっさいです」

尚..「殺す!」

作..「この性格が本性です! 次回もよろ——ぐあ」

10月20日(2)

「ん……？」

私は玄関で待ちぼうけを喰らった

ここの主あるじなのに……

すると輝也君が出てきた

「ん……もういいよ」

私は室内に入った

そこはいつもと同じで女3…男1だった

ま、どうでもいいんだけど。

「何の話をしてたの？」

「ちよつとね……ははは」

弔さんにはなぜか頬が殴られている痕があった

「あ！ それ大丈夫？」

「あーうん “癒デュールヒュブルーゼしの光り”」

ぼわあと感覚では感じたが音は出なかった

優しい光に当たってみるみる回復していった

「さてと、私は帰るわよ？」

「何のようでここに来たの？」

「仕事で寄ったの じゃあね」

なんか言動が鋭い感じがするけどここは帰りたいといってるし帰らせよう

「それじゃあね」

「うん」

がちやりとドアが閉まる音がした

「はー……」

「ふう」

「どうしたの？ 何の話をしてたの 知ってたの？」

「うん 知ってたよ。 あの人の本性知らないの？」

「？」

「魔女^{まじょ}よ。」

「……ぷっ（笑） そんなわけないじゃんー」

「あの人本当は性格超凶悪よ 私殴られたもん」

……そうか……輝也君が殴るわけないもんね

この時はまだこの夜の始まりだとは誰も気づいていなかった

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9863y/>

ようかい×にんげん

2011年12月5日19時57分発行